

第2分科会

分科会名

「子ども～子どものために、それぞれができること～」

協議の柱

『子どもを真ん中に』 今、この考え方がとても大切になっています。子どものために地域住民や学校ができることは何でしょうか？ 事例から学び、参加者同士で語り合しましょう。

1 当日までの分科会運営委員会等での議論

少子高齢社会の中で、子どもを社会の中心に据えて物事を考えていく風潮が高まっています。子どもを取り巻く環境は時代の移り変わりの中で大きく変化しており、様々な立場の人間が子どもの成長に関わっていく必要があります。

分科会運営委員会を重ねていく中で、松本市内だけでも多くの子どもに関わる活動事例があることを知ることができました。

分科会では1つの課題やテーマを設定せず「子どもを真ん中に」をスローガンに、各世代の子どもが主体的に地域づくりに参画している活動や子どものための支援活動など、多様な実践事例を取り上げました。

今回は、コロナ禍でも開催できる内容を考える中で、従来の集会での手法（グループワークなど）は用いず、「話をきく」ことに重きを置き、参加者の、今後の活動へのつながりや発展。また活動に想いのある方が活動を始められるキッカケづくりが持てるような仕掛けを検討してきました。

2 分科会の進め方

松本市内で活動する様々な団体から、子どもを真ん中に据えた活動についての事例発表を伺います。どのようなきっかけで活動を始めたか、具体的な活動内容、どのように子どもたちと関わっているか、活動を通して感じた子どもたちの様子、やっている中で困ったこと、印象深い出来事、これからの課題などをお話いただきます。

報告者

島立っ子 森・杜探検隊 代表

木下 明子 氏

プロフィール

1970 年松本市生まれ。18 歳で上京しアパレルメーカーで婦人服縫製の仕事をしながら夜間学校で服飾デザインを学ぶ。ものづくりの経験を活かし平成 25 年より小学校の手芸クラブ、ものづくりクラブ講師を務める。平成 27 年から「島立っ子森・杜探検隊」自然体験学習チームの代表として活動を始める。平成 30 年より「キッズマーケット」（後援松本市教育委員会）、「子どもカフェ」等を主催し子ども達の為の活動をボランティアで活動している。洋裁屋 akiko collection 代表 二児の母。

報告者

にこにこルーム応援隊 代表

竹渕 那美 氏

プロフィール

2013 年～2016 年に竹渕町会公民館主事、2017 年～2019 年に竹渕町会公民館長、2016 年～2017 年には地域づくり協議会児童福祉部会（現：こども部会）部会長といった、竹渕町会や寿地区の役員に携わる。

現在は竹渕祭囃子保存会で太鼓と笛の指導、竹渕神社浦安の舞の指導、寿田町折り紙の会での指導など、地域に根差した活動をしている。

報告者

はらぺこあおむし 事務局長

増田 龍美 氏

プロフィール

松本市県で 1998 年より、カフェマンマミーアを経営。2020 年 12 月、子ども食堂はらぺこあおむしを開催。事務局長を務める。

発表概要

飲食店経営者の 2 人がコロナ禍の中で子ども食堂を始めることを決意。地域の方々に声を掛け協力を仰ぐ中で、次第に大きな拡がりとなっていく。また、松本市こども育成課、NPO 法人ホットライン信州から様々な情報や援助を頂き、また高校生や大学生のボランティア希望者も多く集まるようになり、感染拡大が一段落した 7 月には夏まつりも開催出来た。活動に参加するメンバーの輪も広がっている。

当初 30 人から 50 人位の提供が出来ればという見通しであったのが、昨年 12 月は 180 食を提供出来た。この間の取り組みと、現在の課題など率直にお話する。

報告者

長野県県ヶ丘高等学校 探究科 担当教諭

金澤 大典 氏

発表概要

現代社会は予測困難な時代といわれ、学力だけではなく、課題を見つめ解決に向けて取組む力（探究を
実践し続ける力）が必要とされている。県ヶ丘高校では2018年から探究科を設置し1年次には「信州学」
として生徒の目線で身近な疑問や話題から地域課題を見つけ、解決に向けて産官学と連携し取り組み【探
究】を進めている。

「島立っ子 森・杜探検隊」 ～自然体験学習チーム～

島立っ子 森・杜探検隊
代表 木下 明子

1 事業の概要

(1) 事業背景

松本市島立地区における住民主体の地域づくり活動の一環として平成27年度発足。松本市地域づくり推進交付金を活動資金として活動を開始。

「島立っ子森・杜探検隊」自然体験学習チームとして島立公民館、子ども会育成会、学校、保護者、地域住民と共に豊かな自然に恵まれた地域で歴史・文化、自然体験を通じて学ぶ活動をしている。

(2) 事業のねらい

体験学習を通じて、自然の豊かさを五感で感じ、歴史や文化を学ぶとともに自然との共生、命の大切さを育み、地域全体で子ども達を育てていく。

また、小学校や子ども会育成会など他団体との連携により連帯感を高めて、地域みんなで子ども達を育てる。そして、将来、地域の為に活躍してくれる人材を育成する事業としていきたい。

(3) 具体的な取り組み内容

- ア 地域内の神社の歴史や文化を学び、住民が大切にしてきたことなどを大総代や地域の方から教わり、ネイチャーゲームをして自然に触れ生息する生き物について学んだ。
- イ 島立には豊かな湧き水が流れわさび田があることを知ってもらい、特別にわさび田へ入らせて頂き、わさびの育成、湧き水、わさび田の中にいる生き物観察、わさびの収穫体験、食べ方、試食をした。
- ウ 歴史の里では、館内の説明を学芸員にして頂き、学びの後には、桜の草木染と昔の遊びをして楽しんだ。
- エ 県林業センターでは、地域の方を講師に森の中の植物や生き物観察をし、クラフト体験で創造性を育む自由製作をした。
- オ 烏川で溪流歩きをし、水辺の危険回避を学び水難に遭った場合の行動を学びながら自然の中で思いっきり遊んだ。ぬかくどご飯と豚汁作り、流しそうめん等も行った。
- カ 朝日村では、川あそび、森林セラピー、自由木工クラフト、ヤマメのつかみ取りをした。ヤマメはさばき体験もして、炭火で焼いて食べ、良い食育になった。
- キ 秋の山遊びは、芥子坊主山を歩き、自然の中で拾い集めたもので自由製作をした。用意されたものではなく、自分で集めた材料で作る創造性を育む、とても素晴らしい時間となった。
- ク 「火を知ろう！ 人は火で進化した！？」と題して人と火の関係を学びながら実際に火おこし体験をした。その火を元に焚火をしてすいとんやおやつを作って食べた。
- ケ 真冬の大雪遊びでは、森の中を雪中ハイキングし、三郷の黒沢の滝、乗鞍の善五郎の滝まで歩いた。信州の冬の厳しさ、大自然の雄大さを五感で感じながら雪中運動会もおこなった。
- コ 三九郎の歴史やいわれを学び実際に三九郎の組み立て方や紐の結び方、まゆだまの作り方を地域の方から教わった。
- サ 凧作り凧上げをして昔の遊びを楽しんだ。松本みすず細工などの民芸についても話題にし、みすず細工に使われているすず竹で風車を作った。
- シ 野外力検定を行い、五感をフルに使い、自分の感覚を楽しみながら確認する体験となった 等々

2 他との協働・連携

この活動は主に島立の住民の皆さんのご協力で成り立っている。住民の方に講師をお願いしている。専門的な事はネイチャーガイドをお願いし、計画段階から一緒に準備をしている。現地ガイドへの依頼や下見をするなど安全対策の連携もとっている。松本市の関係は免除申請で活動費が抑えられている。

近隣の市町村でも子ども達の為の活動である事を理解して頂きできる限りの免除などご協力がある。他にも必要なものを準備するにあたり、多くの住民の方々のご協力が素晴らしい。何よりも、公民館に母体があることで地域全体の繋がりをもつことができ、多大なご協力を賜っている。

3 成果・課題・今後の展望

(1) 成果

子ども達が自分の住む地域の歴史や文化を知ることで良さを知り慈しみ、思いやる豊かな心が育っている。自然の中でリアルに体験し五感で感じたことで創造性を育むことができ大きな自信を持ち自ら進んで行動することができるようになった。異年齢交流ということでも、互いに思いやりながらよく周りを見て気づき行動できるようになってきている。

活動を始めた頃に小学生だった子ども達が中学生、高校生になってもお手伝いに来て参加してくれている。そして、お兄さんお姉さんを見て自分も中学生になっても来たい、と言ってくれる子ども達がいる。保護者からも子ども達は地域に育てられている、だからできることはお手伝いしたい、と言って参加してくれる人もいる。この活動に参加することで子ども達は心身共に成長している。そして、子ども達だけでなく大人の皆さんも変化がある。子ども達から元気をいただいて地域の宝である環境を守り続けることへの励みにもなっている。

大人の皆さんの役割は子ども達の安全対策と余計な手出しも口出しもしないで見守るということをお願いしている。様子を見て困っていたら声をかけ励ます。それにより本来誰もが持っている、自らの力を発揮し、どんな時代がきても力強く生きていける心根が育っているのだと思う。地域全体の連携・協働が素晴らしい。

(2) 課題、今後の展望

活動の認知は地域に広まってきているが、より保護者や小学生や先生方へ活動の理解と参加を促したい。併せて現状は有志地域住民が主体のため、今後持続していくためのスタッフの仲間づくりが必要だ。

子ども達は自らの力で気づき動ける力を持っているので、大人たちが手や口を出しすぎないようにして大切な自らの力を思いっきり発揮して欲しいと願っている。

昨今の情勢の中でどのように開催していくか模索しながら、子ども達にとって貴重な体験を地域中心にできる限り活動していきたい。

「寿小学校にこにこルーム応援隊」

にこにこルーム応援隊 代表
竹渕 那美 氏

1 事業の概要

○ 事業の背景

寿子ども育成会長にPTA役員から「子どもの居場所が欲しい」という相談があった。さらに地域づくり協議会の児童福祉部会の中でとったアンケートの中でも同様の要望があったため、寿小学校に相談すると、空き教室を子どもの居場所として活用するのはどうか、という提案を頂いた。

地域づくり協議会の中の児童福祉部会で検討していく事になった。

○ 事業のねらい

地域の人と、昔からの遊びを通して交流する。

○ 具体的な取り組みの内容

にこにこルームの教室で、20 分間の休み時間を使って、コマ、けん玉、お手玉、あやとり、折り紙、輪投げ、クロック、かるた、将棋等で、子ども達と一緒に遊ぶ。

七夕、ハロウィン、クリスマス等、季節の行事を行なう。

2 話し合い判断し行動に移したプロセス

上記の様な経緯で発足したが、具体的なやり方に迷っていたので、上田市神科小学校で行われていた「おたすけ^と十有志隊」の活動を視察に行った。(平成 29 年 11 月 27 日) 視察に行く前までは、当然の事のように交流は放課後のつもりでいたが、神科小学校では2時間目の休み時間を使っての交流を行っており、私達もそれに習う事にした。視察には、児童福祉部会のメンバーや地域の役員だけでなく、信州大学の荒井英次郎准教授、当時の小島校長先生も参加して下さい、アドバイスも頂いた。

当時児童福祉部会の部会長だった私が代表になり、プロジェクトチームを立ち上げ、具体的な事を決め、ボランティアの募集や、遊びの道具の寄付依頼を地域に向けて発信していった。平成 29 年度中に何回かの試行的な交流をやりたいと考え、平成 30 年 1 月 26 日(金) 1 回目の交流を実施。2 月 9 日(金) 2 回目、これまでは教室にもボランティアにも名前がなかったので、教室内に箱を置き、子ども達に投票してもらった結果、「にこにこルーム」となった。2 月 23 日(金) 3 回目、試行的に実施した3回の交流を通して、「やれそうだ」を実感できた。今までは地域づくり協議会児童福祉部会の部活動としてやってきたが、次年度は、「にこにこルーム応援隊」として独立し、組織化して、定期的の実施する事となった。

その後、平成 30 年度、31 年度(令和元年度)の2月14日までは、原則月2回、普通に交流が出来ていたが、コロナウイルスのために中断を余儀なくされた。交流が出来ない間も、放課後の教室の消毒作業の手伝いを行ったり、令和2年のクリスマスには、クラス毎に手作りのカードと一緒に、全校生徒に折り紙で作ったツリーとサンタをプレゼントしたりした。そして今年度4月からは、手指消毒を徹底し学年を限定したりして交流が出来る様になり喜んでいましたが、現在はまた中断している。

○ 交流の進め方

にこにこルームの教室へは、昇降口を通らずに外から入る事が出来る。その日の鍵当番は、事務室に挨拶をし、鍵を開け掃除をし、他のメンバーが来るのを待つ。

10時からミーティング、それぞれの遊びの担当を決めて準備をし、10時20分のチャイムと共に子ども達が入って来て遊び始め、10時40分のチャイムと共に帰っていく。

片付けをした後は反省会。その日の参加人数の報告、各コーナーでの良かった点、悪かった点の報告をしてもらい、

直せることは次回必ず改善できるようにしている。

3 成果・課題と今後の展望

この交流を始めてから約4年が経とうとしている。最初は資金が全くなかったのですが、自分達でお金を出し合って運営していたが、地域づくり協議会でベストを作ってくれたり、社会福祉協議会からも予算を取って頂いたり、とてもありがたいと思っている。

子ども達もとても楽しみにしていてくれて、次回の予定を聞かれることや、道で行き会った時「あ、にこにこルームのおばちゃんだ。」と話しかけてくれる子もいる。ただ、教室に来て遊びの輪に入れない子も居るので、そういう子のために、必ず全体を見られる人を作り、声をかける様にしている。

現在、メンバーは28人登録されているが、常時出て来てくれるのは多くて20人位。100人以上の子ども達の相手をするには足りてはいない。平均年齢も高くなりつつあるので、メンバーの募集もしていきたい。

にこにこルームに来てくれた子ども達が、「楽しかった～、また来るね、ありがとう～」などと言ってくれる事が、何よりも私達の励みになっている。その笑顔を見るために、これからも頑張っていきたいと思う。